解説

継続は力なり「推進工事技士」

田中（たなか） 秀範（ひでのり）
機動建設工業㈱
九州支店次長
（推進工事技士・1級土木施工管理技士）

1 はじめに

弊社に入社にして早40年の月日が経過しました。入社5年目までは、小口径管推進から大中口径管推進の掘進機のオペレータとして全国（海外もある）を回り、それぞれの地域特有の土質の違いによるトラブルを経験しながら操作方法を学びました。それ以降は現場の施工管理者として、協力業者に掘進機の操作、精度管理（方向修正の指示）を行いながら日々技術の向上を目指しました。

曲線推進に関しては、現在のような測量機やPCシステムではなく、距離は巻尺、角度はトランシット、計算は電卓、方向修正の指示は方眼紙に測量結果および掘進機の方向を明記して決定しました。このような作業を行っていたため、1日の作業の半分が測量結果待ちだった記憶があります。現在は、自動測量システム等を使用し短時間で結果が出ますが、そのころの手法が今の私にとって非常に大きな経験だったと感じています。

2 資格取得をめざしたきっかけ

入社して数年後、推進工事技士の資格ができたと記憶しています。その当時は、それほど重要視されていないと思い日々現場での施工管理を行っていました。ある現場でシールド専門の元請け（某ゼネコン）の所長に「推進の専門業者なのにそんなことも知らないの？」と半ばあきれ顔でいわれてしまいました。いわれたことが悔しく上司に報告したところ、推進工事技士の資格取得を進められました。

確かにその時は、現場オンリーで専門的な知識が乏しいことに痛感させられていました。その当時は名古屋支店所属で、同年代の社員も受験するとのことで一緒に必死に勉強しました。その甲斐あって全員が無事合格できました。試験は大阪会場だったのですが、当時の試験方式は、学科・実地を1日で行っていました。

今でも推進工事技士の試験勉強で学んだ知識が現場での経験に活かされ、日々現場の施工・品質・安全管理に役立っています。

3 活用事例

ご存じの通り、私が所属している九州支店管轄内で福岡県は推進工事技士保有者が約1.100人（2021.04.01現在）と全国1位となっています。多くの保有者が居る理由としては、推進工事施工業者が多いこともありますが、かなりの自治体で入札時の配置技術者の技術力の一項目に（公社）日本推進技術協会の「推進工事技士」試験に合格し、資格を付与された者の配置を義務付けております。それだけ「推進工事技士」の需要が高い地域です。